

矢吹晋インタビュー

中国研究五十年——己を知り、相手を知ることが友好の基——

2011年3月11日の午後2時46分。日本の観測史上最大規模となる巨大地震が日本列島を襲った。そしてこの時、矢吹晋は東京の日中友好会館で、中国メディア『南方都市報』の取材を受けていた。その記事によると、突然大きく揺れだしたビルに慌てふためく記者に対し、矢吹は微動だにせず、揺れが収まるや否や「さあ、取材を続けましょうか」と声をかけたという。

その一年後、私が六本木の国際文化会館で会った矢吹は、確かに冷静沈着で確固たる信念を持つ人物だった。聞けば1958年に東大で中国経済論を専攻し始めて以来、50年も中国研究を続けているという。これまで出版したのは『文化大革命』（講談社）、『＜図説＞中国の経済』（蒼蒼社）、朝河貫一『入来文書』邦訳（柏書房）など。共著・翻訳も含め出した著書は都立中央図書館で確認できるものだけでも英書2冊を含め53冊になる。まさに中国人以上に中国を知り尽くした専門家なのである。

矢吹が中国研究を始めたきっかけは、過去の歴史を踏まえ、日本が長期的に発展を続けるには、隣の大国中国を知ることが不可欠と感じたからだ。「日本人は『大化改新』以来、一方では中国文化を大胆に取り入れ、他方では易姓革命思想を拒否しつつ、日本独自の文化と国民を形成してきました。そのような日本がなぜ中国と不幸な戦争を経験したのか。どうすれば平和を維持できるのか。敵(相手国)を知り、己(自国)を知れば、百戦危うからずという古語は、平和が戦争に打ち勝つ論理としても使えるはずです」。

取材中、矢吹は自身の新著を片手に、昨今の日中の政治情勢や社会問題についての見解を、データを引き合いにして語ってくれた。その説得力のある分析と斬新な解釈の数々は、私に「彼は中国に特別な情報源を持っているのでは」と勘繰らせるほどのものだったが、意外にも矢吹は全ての研究を公開された情報をベースに行っているという。野村資本市場研究所の関志雄氏によると、矢吹は「パソコンがまだ無かった時代、『人民日報』を一字一句読んで情報を集めていた」。固定観念や偏った報道に惑わされず、「事実とロジックを信じるのが大切」だと言う。これは我々がこの情報化社会を生き抜くために心に留めるべき考え方だろう。

矢吹は今後、自身の過去半世紀にも及ぶ研究成果の総括を行う予定だ。日本人の中国に対するさらなる理解、そして中国自身の現代史研究の発展のためだ。日中両国の相互理解と交流を進めることが大事だと考えている矢吹は、特に日本人は中国人に学ぶべきだと考えている。「バブルが弾けて20年、日本人は何時しか失ってしまったバイタリティとハングリー精神を、中国人から学ぶべきでしょう」。2012年5月29日、国際文化会館にて。インタビューは張一同学。原載、北京大學校友會編、『今こそ伝える日中100人』白帝社、2013年12月刊、301～303ページ。

